

白金葎

12月号



平成28年12月発行

第70号

白金葭定例会句会案内

一月二十(金) アビスタ第五 兼題…新年一般

二月十七日(金) 〃 第四 兼題…雪解、梅

三月一七日(金) 〃 第五 兼題…東風、涅槃

兼題句参考句(二月二〇日分 新年一般)

笑初して少年変声期に入りぬ
すぐ帰る若き賀客を惜しみけり
読初めは荻生徂徠や致道館
矢面に立つ人はなし弓始

石川和子
能村登四郎
古川京子
桂信子

南座の餅花あかり旅三日

山尾かつひろ

餅花を見上ぐるたびに華やぎて

細見綾子

母ひとり残して帰る三日かな

平賀節代

松過ぎの又も光陰矢の如く

高浜虚子

精神はぼつぺんは言うぞぼつぺん

阿部完市

蓬萊や東にひらく伊豆の海

水原秋櫻子

地に低く幸せありと福寿草

保坂伸秋

福寿草家族のごとくかたまれり

福田蓼汀

少子化や夫と二人で追羽根をつく

石津はな

日本がここに集る初詣

山口誓子

初富士を隠さふべしや深庇

阿波野青畝

初日いま楢円核爆発あるな

三橋敏雄

月例会会報(16/12/16 10名

枯野、炬燵)

飯田孝三

登校の子等の足並枯野晴れ
句敵の半ばはほとけ古炬燵
宿題のやにはに寝息堀炬燵
枯野来て銀匙にすくふカレーの香
のらくろの昭和の背中置炬燵

増田陽一

土深くこほろぎ冬を生き続く
寒月光戯るロダン「地獄門」
萱ねずみ幽かにうごく枯野かな
建築の角々痛し冬青空
独り居の炬燵分解されしまま

光成高志

枯野駆くドギーブレスを引き連れて
半年の炬燵生活五十年

一部屋の世帯始めの炬燵哉

がうぐと風が鳴るなり枯野原

白鳥の群れ鷗の群れ混じり合ふ

光
みち

吊橋の繋ぐ冬山吹き荒ぶ

幼な子の炬燵が舞台マイク持ち

冬の旅殺生石を一瞥す

二人して食べこぼしをり炬燵掛

捨猫の命の声す枯野原

松村幸一

熱うして後生極楽おきこたつ

狐火の峠越えたるあと知らず

赤紙を受取りし日の障子かな

木枯のしじまの熱き日向かな

枯野行くあれば山頭火ではないか

吉羽多美子

父母のゐてはからも居し炬燵かな

木枯しや来し方想ふ終ひ風呂

単線の上り待つ間の枯野かな

廃校の長き廊下や冬霞

倉田紀子

落雁も手の窪に割る炬燵かな

枯野原仏に似たる石拾ふ

独り居の炬燵に光る刺繍針

うたた寝の炬燵に見ゆる遠筑波

観音へさりさりと踏む落葉かな

浅野正美

渦潮を寒風うけて覗きたり（大鳴門橋）

独り居や今年も炬燵つくらざり

枯野原こんなところに失せし物

坐る場所定まりて居し炬燵部屋

土もたげきらきら光る庭の霜

武者昭七

父と子の将棋に出してふかし諸

寒灯や出しそびれたるラブレター
 枯野行く人風飄々と髯を吹く
 寒雷や次に鳴る間の静寂^{しじま}かな
 足裏を伝ふ温さよ掘炬燵
 積む雪や昭和の演歌深夜便

磯目健二

朝まだき母が炭足す炬燵かな
 一筋の繁道^{しげじ}の通る枯野かな
 沼へ下る坂道までの枯野かな
 草陰に道祖神坐^{いま}す枯野かな
 本半ば開き炬燵に夢結ぶ

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

5 朝まだき母が炭足す炬燵かな
 4 落雁も手の窪に割る炬燵かな
 4 捨猫の命の声す枯野原
 3 枯野原仏に似たる石拾ふ
 3 枯野行く人風飄々と髯を吹く
 1 枯野行く風飄々と髯を吹く

健二
 紀子
 みち
 紀子
 昭七

3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1
独り居の炬燵に光る刺繍針	単線の上り待つ間の枯野かな	萱ねずみ幽かにうごく枯野かな	本半ば開き炬燵に夢結ぶ	のらくろの昭和の背中置炬燵	吊橋の繋ぐ冬山吹き荒ぶ	木枯のしじまの熱き日向かな	独り居の炬燵分解されしまま	父母のゐてはらからの居て炬燵かな	父母のゐてはらからも居し炬燵かな	句敵の半ばはほとけ古炬燵	宿題のやにはに寝息掘り炬燵	狐火の峠越えたるあと知らず	二人して食べこぼしをり炬燵掛	足裏を伝ふ温さよ掘炬燵	草陰に道祖神坐 ^{いま} す枯野かな	白鳥の群れ鷗の群れ混じり合ふ	寒灯や出しそびれたるラブレター	父と子の将棋に出してふかし藪	一部屋の世帯始めの炬燵哉	一筋に繁道 ^{しげじ} の通る枯野かな	一筋の繁道 ^{しげじ} の通る枯野かな	枯野行くあれは山頭火ではないか		
紀子	多美子	陽一	健二	孝三	みち	幸一	多美子	多美子	多美子	孝三	〃	幸一	みち	昭七	健二	高志	昭七	多美子	高志	健二				
																								幸一

1 寒月光戯るロダン「地獄門」

1 木枯しや来し方想ふ終ひ風呂

1 枯野原こんなところに失せし物

1 枯野原こんなところに落とす物

1 赤紙を受取りし日の障子かな

1 冬の旅殺生石を一瞥す

1 うたた寝の炬燵に見ゆる遠筑波

1 廃校の長き廊下や冬霞

1 熱うして後生極楽おきこたつ

1 積む雪や昭和の演歌深夜便

1 渦の道寒風うけてのぞく海（大鳴門橋）

1 渦潮を寒風うけて覗きたり（大鳴門橋）

1 半年の炬燵生活五十年

1 独り居や炬燵つくらず冬いくど

1 独り居や今年も炬燵つくらざり

1 枯野来て銀匙にすくふカレーの香

1 沼へ下る坂道までの枯野かな

1 寒雷や次に鳴る間の静寂^{しじま}かな

1 枯野駆くドギーブレス^{犬の呼吸}を引き連れて

1 枯野駆くドギーブレスを引き連れて

1 幼な子の炬燵が舞台マイク持ち

1 坐る場所定まりていた炬燵部屋

1 座る場所定まりて居し炬燵部屋

陽一

多美子

正美

幸一

みち

紀子

多美子

幸一

昭七

正美

高志

正美

孝三

健二

昭七

高志

正美

みち

正美

木枯のしじまの熱き日向かな

土深くこほろぎ冬を生き続く

登校の子等の足並枯野晴れ

観音へさりさりと踏む落葉かな

土もたげきさらきら光る庭の霜

がうぐと風が鳴るなり枯野原

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

一句鑑賞

幸一

陽一

孝三

紀子

正美

高志

光成高志

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

昭七

句を始めとしてあれから追悼句が続いているからである。蟋蟀が土深く潜つて冬を生き続けている如く、冬の時代に入つても私は生き続けるから待つていておくれ、と悦子さんに呼び掛けた決意の句である。11日の兜太講演会に出た序にお墓にお参りました。

一筋の繁道しげじの通る枯野かな

健二

一筋の道が枯野の中に通っている。通る人が少なく草が茂っている道である。繁道^{しげじ}は万葉集に「大野路^{おほのち}は繁道茂路^{しげみち}しげみち 茂くとも君し通^{かよ}はば道は広けむ」（作者未詳）の繁道を使つたものであろう。この一筋の道と枯野との係りが句の命。我が人生は斯くの如き枯野である。枯野の寒往けば則ち暑来たりであつて青々とした青野になる未来があるのだという「かな」である。一筋の道はわが道なのであると。

一句鑑賞

飯田孝三

朝まだき母が炭足す炬燵かな

健二

昭和がまだ若かつた頃の母親像をまざと見る。日露戦争前後の生れ、戦地に息子を亡くした人もいたろう。団塊以後の人達にはピンとこないかもしれないが、こんな句に出会ふといふ目がうるむ、時代の影など幼心に見える筈もない。ア12音を畳む韻きは、自ずから滑らかで明るい。日本は貧しかったが、山川の空は屈託

なく明るかつた。いつの世も母は永遠である。

一部屋の世帯始めの炬燵哉

高志

「世帯」の読みは「しよたい」、所帯ならぬ「世帯」は、そも戦後を抜けた時代を物語る。今や子供たちはそれぞれ独立、もとの二人になって、始めて炬燵にさし向つた、あの日よりの“さまざまのこゝろ”では語り合う。「炬燵」はいわば家族ファミリーのルーツの証なのだ。終辞「哉」が懐胸の深さをしみじみ伝える。「始め」は美しい詞だ、書^{ふみ}始め、鋤始め、弓始めなど。

独り居の炬燵分解されしまま

陽一

家庭用エアコンが普及し、今では炬燵は遺物だが、炭火炬燵のほのぼのとした温さは忘れられない。昭和30年頃から、四脚着脱できる電気コタツに取つて替わられた、掲句もそれ。分解されたままの炬燵は、悦子さんを亡くされてしまった心情そのものである。季語「炬燵」の心はスイートホーム、つき詰めれば夫婦和合にあるのだ、そう気づかされた一句である。

枯野行くあれば山頭火ではないか

幸一

僧形の裾吹かれゆく山頭火が見えてくる、後姿だ。俳号の由来は詳らかにしないが、その先に煙り吐く山の姿が見えてくる、彼に唱和した口語詠の手柄だろう。思わず口をついた調べがいい、ア9音を畳み、句切れ

にカ行音を配してすべらかで明るい。「放哉」だったら句にならぬ。中下、句跨り唐突の口調は、はっと驚く迫真の氣息そのものではないか。

枯野原仏に似たる石拾ふ

紀子

枯野、枯原といえは石仏だろう。ところが石の地藏さんならぬ、「仏に似たる石」である、しかもそれを「拾ふ」、まんまと肩透かし、常套に入り常套を返した面白さがある。その知らんぷりの諧謔が魅力。吹きはらしの自然に人間の行為を加え、息を通してほっとさせるものがある。「枯野原」は晴れて明るい。

足裏を伝ふ温さよ掘炬燵

昭七

一読、掘炬燵に坐つた時さながら、温温ぬくぬくした気分になる。「置炬燵」でも、「抱炬燵」でもない、「掘炬燵」ならではの肌身の実感がそのまま伝わるのだ、リズムがいい。足裏「を」が句のいのち、仮に「に」だったら説明をでない、さらには、温さ「よ」の呼応も手伝つて、つくづく夢心地に誘われるのである。

一句鑑賞

武者昭七

一筋に繁道の通る枯野かな

健二

枯野を一筋貫いてまっすぐはしる道。実景よりも心象風景とりたい。「一筋に」の一語にあたりを払う迫力がある。孤高の人生が髣髴とする。

熱うして後生極楽おきこたつ

幸一

「後生極楽」はなんとも大げさで滑稽だけれど足をいれたとたんその期待どおりの熱さ（「温い」）ではない。作者は「熱い」のが好きなのだ）に嬉しくて、つい「後生極楽！」とさけんでしまうのだ。滑稽味と哀愁とが漂い出す。

捨猫の命の声す枯野原

みち

捨猫の姿は時々見かけるし鳴声を聞くのもまれではない。しかしその声を「命の声」と感じたことはなかった。けれど考えてみればその通りだ。悲しみどころかそれはまさしく命を繋ぐための必死のこえなのである。作者はそこに思い至って肅然としたのだ。背景の枯野原が一層の寂しさを誘う。

二人して食べこぼしをり炬燵掛

みち

子供の頃食べこぼしを作つてよく叱られたものだ。「もつとしっかりたべなさい」とけれど今はいつのまにか夫婦そろって食べこぼしをつくるトシになつてしまった。子供にかえつたと笑つてすまそうか。入歯のせいにしてやろうか。トシはとりたくないもの。ほろ苦い味のする句である。

観音へさりさと踏む落葉かな

紀子

観音詣でも回を重ねているとほとけさまを拝みに行

くというよりも恋人にでも会いに行くようなところのときめきをおぼえるようになる。好きな観音ともなればなおのことだ。作者もそんな心境になっているのだろうか。「さりさり」という澄んだ擬音語が心地いい。

枯野原こんなところに失せし物

正美

時に思いがけない場所から探し物が姿をあらわすことがある。半ば嬉しく半ば気抜けするというのは誰でも覚えがある。「こんなところに」に実感がにじんできている。草野球のボールだとか。

一句鑑賞

磯目健二

父母の居てはからの居て炬燵かな

多美子

炬燵に家族が集っていた遠き日における日常を、しみじみと回想する句である。二度繰り返される「居て」は、現在の「不在」を意味する反語的表現。作者の万感の思いが籠もっている。追憶なら「居て」は過去形の「居し」とすべきではないかという、尤もな意見が出た。しかし過去を現在形で表現する歴史的現在という叙法が短詩型俳句でも許されるなら、この句のままのほうが強調的な効果をあげていて、いいように思われる。

枯野原仏に似たる石拾ふ

紀子

空漠と拡がる枯れ野をひとり歩んでいて、ふと地面

に転がる小石に目をとめる。一瞬、小さな石仏に思えて手を伸べた。考えてみればそのとき仏あれという気持ちの心の中に宿っていた気がする。その心の投影が小石に顕れたのである。心に疑わずば、その如くうつものになる。掌中の石仏と共にあとの道を辿るならば、枯野行く孤独感も幾分薄れるに違いない。

枯野行く人風飄々と髯を吹く

昭七

「枯野行く人」とあえて字余りにしたのは、人世の荒野を往くひとりの男との意を強めるためである。吹きつける寒風に向かつて髯の男が面をあげて昂然と、しかし肩で風を切る風ではなく歩むとき、風は飄然と髯をそよがせて流れる。飄々は風の音であるとともに男の悠揚迫らない生き様をも示している。ローン・ウルフの如き男の風姿を躍如とさせる、ユーモアとウィットに富んだ佳句である。モデルは作者によれば光成氏という。

萱ねずみ幽かにうごく枯野かな

陽一

満目蕭条たる枯野を行くと、萱の茂みに棲む小鼠が葉陰を動くのが一瞬仄見えた。そのあと静寂はより深まる。正に静中に動あり、荒寥たる枯野の内懐に息ひそめて生きる存在を目敏く看取する感性の豊かさ。枯淡とさびをも感じさせる句である。

廃校の長き廊下や冬霞

多美子

周囲の風景を包み隠す冬霞の中に、廃残の校舎が寂莫と浮かぶ。校舎の中を覗けば、人氣無い長い廊下は、連なる教室の多さであり、かつて学んだ生徒の多さを示している。それは背後に過去の盛時の歴史があったこと、そしてこの廃校へ寄せる思いが現在も多く存在することを意味している。世の中の推移と盛衰の哀感がしみじみと滲む。この句では「冬霞」の季語がじつによく生きている。

一句鑑賞

増田陽一

朝まだき母が炭足す炬燵かな

健二

早朝、まだ明けやらぬ部屋の中で母がひとり起きて炭を継いでいる。いつも家族の知らぬ間に起きて働いていた昔の母親像である。炭を足す炬燵なども懐かしい。これは掘炬燵で、部屋の暖房はこれだけだったかも知れない。「まだき」は「未だし」に近いと辞書にあり、久しぶりに聞く語であるけれど、効果があつて昭和の回顧的な情緒を強めている感じがする。

のらくろの昭和の背中置炬燵

孝三

と、これも回顧的情緒の句となる。のらくろと言えば戦前戦後、田河水泡の漫画で「少年倶楽部」誌に長く連載された。前後して愉快な「蛸の八ちゃん」、また

僕が小学低学年の頃は「凹凸黒兵衛」があった。「のらくろ」は犬で、「くろべえ」はウサギだった。何故か両方とも黒いのだ。水泡氏の漫画はデッサンがしっかりしていて、滑稽な中に生活実感があつた。「野良黒とは俺のことなんだ。」と作者が語ったと小林秀雄が書いている。また、島田敏三の「冒険ダン吉」、坂本牙城の「タンク・タンクロー」などと、この句のお陰でいろいろ思い出してしまった。戦前の昭和の子たちも結構漫画には熱中したのだった。

枯野駆くドギーブレス犬の呼吸を引き連れて

高志

面白いから後で注目したけれど、さて、Doggy は「犬のような」かな？それなら犬そのものを連れているのではなく、「換喻」として、ハアハアと息をはずませながら枯野を駆けて行く景を想像した。「枯野」と「犬の呼吸」の取り合わせ。ついでに誓子の「土堤を外れ枯野の犬となりゆけり」を思い出した。

寒灯や出しそびれたるラブレター

昭七

遂に投函しなかった恋文「が今頃出てきた。かなり年を経た青春の記念物か。寒灯が微妙に哀感を誘う。同じ作者の先月の句「昔のことさと笑ひ捨てたる夜長かな」と、一寸きわどいところを併せて鑑賞したくな

狐火の峠越えたるあと知らず

幸一

伝統的で定型に当てはまった手練で隙がなく、一読心地よい句である。狐火を目で追ったのは峠まで、あとは杳として行方知れず、妖しい味も備わっている。

木枯しや来し方想ふ終ひ風呂

多美子

冬の風が窓打つなかで独り深夜の風呂に浸かっているひと。「来し方」は万人悲喜交々であろう。ここで「来し方行く末」ではないところが良い、とは僕だけの気持か。老齢となると行く末など案じてもなるようにしかならず、来し方には楽しい事もあったなあ、などと。

捨猫の命の声す枯野原

みち

子猫であろうか。拾ってもらえるかどうかが分かれ目。だから「命の声」と聴きとめた。芭蕉のように捨て子の泣き声を振り切つて旅を続ける・・ほどの深刻さは無いけれど、それでも気になる啼き声である。

冬の旅殺生石を一瞥す

みち

殺生石は那須にある有名な火山ガスを発生する危険地帯。九尾の狐、玉藻の前と、妖しい伝説もさることながら、蝶や蜂が死んで落ちると言う硫化水素が危険なので近寄らず通り過ぎたという。前句と同じく緊張感のある簡明な表現がとてもいいと思う。名句に数えたいけれど、人によつては「冬の旅」「殺生石」「一瞥」とみな寒い単語揃いでは単調か、という好みもあるか

も知れない。

落雁も手の窪に割る炬燵かな

紀子

炬燵で、粉を固めた菓子である落雁を割った、と言っただけだけれど、普段はラクガンの「落ちる雁」と言う表記を意識していないので、「雁を手の平に？」一瞬おやつと思わせるところがあり、「手の窪に」もうまい。八田木枯さんの句には「行く雁の翅のさはりし違ひ棚」などと雁が出没する。

座る場所定まりて居し炬燵部屋

正美

今回「炬燵」の兼題句では背景の家族が「多い」か「二人」か「独り」かによつてそれぞれの情緒に別れ、既視感すれすれのところで相違があつて面白かつた。掲句は「座が決まっていた」ことに着目しているところ、昔の囲炉裏端の席以来のしきたりは続くのである。(下五「炬燵かな」でどうでしょうか)(この間、昔の「さざえさん」の漫画で、男の子が「紅白」を見るのに炬燵の指定席券を勝手に作つて家族に売りつける場面があつたけれど)

俳窓評論纂

*俳句鑑賞読本(全) 飯田龍太(一九八四立風書房)を陽也さんから貰った。小山泰里さんの蔵書であつたものだ。主宰する雲母十年間の秀作についての鑑賞文

を収録したもの。龍太主宰の選句四三二句についての鑑賞文が載っている大部（449頁）な本。冬の句で親しみのある句を少し書いておく。

霜晴の鯉手づかみに佐久平

後藤秋邑
牧さと流

雪で手を洗へば聡き浅間あり
どの家も雪の満月忘れぬし

本宮哲郎

霜月の川瀬は山のひびきもつ

毛利於漂

切りがないが、龍太の鑑賞文を読みまた句に返るとなるほどと思わせる句ばかりである。表題の所以。

*句集「走馬燈」を浅野正美さんからいただいた。著者は杉山マサ子さん。正美さんのご母堂である。非常にわかりやすく読みやすい句ばかりである。自分の生活を俳句に結晶されておられ、好感の持てる句集である。瞬間選句した句を掲載する。

美術館出で師走の街を行く

母逝きて五十回忌や萩盛り

花冷えや雨の街灯日本橋

まゆはきの月の残りて寒日和

新栗をゆでて仏に供へけり

柗の花のこぼるる算盤塾

藁焚きし跡くろぐると冬田かな

山鳩の声くぐもりて今朝の秋

所々に自句自解が入っているのでマサ子さんの境涯がわかる。

それによると、今から九年前にご主人と死別された。その時の薬局の方のご縁で俳句を始められたとか、ご主人から俳句を頂いたように思うと書かれてある文章は感動的である。

ブランターに穫れし豌豆両の手に

たんぼの絮も乗り来て秩父線

母の日や白き日傘を送らるる

就職の孫よりもらふお年玉

目高の子に個性の有りてはじき合ひ

一湾を見おろす丘の百日紅

山茶花や肩なだらかに救世観音

ペダル踏むスワンボートに蓮の風

立葵咲くや日比谷の見附跡

満月と月下美人の一夜かな

亡き人に語りかけつつ柿を挽ぐ

この柿は鷺沼のご自宅に植えて三十年近くなり二階より高くなった、ごまがいつばい入っている柿とか。私の実家にもあって、向こうでは「きねり」と云った。

ひとむらの数珠玉刈らずありにけり

セーターの目数たしかめ続き編む

酉の市屋台のおでん良く売れて

数へ日の使ひ切つたるボールペン

起震車の地震体験年の暮

黄八丈の蓑を引きて女正月

麦秋の真つ赤な太陽沈みゆく

網を張る早稲の田圃のありにけり

鈴虫や鳴きやみしあと耳済ます

春寒し丸山古墳の丘に佇つ

団扇風好む歳となりにけり

息こめて卒寿祝のケーキの灯(H. 24年)

鈴虫の翅すり合ふを見てをりぬ

仙厓の如く生きたし柳散る

わが生れ武蔵本庄保己一忌

ながらへてわが子の古希や花の宿

ぼる市に見つけし二尺差し求む

亡き人の書斎の窓辺藤明り

杉山マサ子さんは右の句にある通り武蔵本庄の生れとか。今

は埼玉県本庄市八高線の通る町であり、高崎に近い。もう二年前になるが、正美さんを誘い高崎経由甘楽町に蒔蕪掘りの吟行に行った。その帰り車中でご母堂のことをよくしゃべられた。

別れた後の年内の句会には出られなかった。その訳を後で聞いてびっくりした覚えがある。「一病の難を免れ年酒くむ」は翌年の新年の正美さんの句である。何が書きたいかというところ、正美さんのご先祖の魂が正美さんを守ったのではないかと云う事である。あの日、友達が訪ねて来られその前で意識を失ったということは、偶々だと思われない。何でも後でかこつけると言われそうであるが、最近私は見えないものに守られているよう

に思えるのである。塙保己一は後記の菅茶山、頼山陽、本居宣長、小林一茶、与謝蕪村皆コンタンポラン（同時代人）である。

江戸時代の学者は今と全然違うのである。保己一の「群書類従」を思うだけでもそれがわかる。それを心に深く誇りに思われているのだ。ご母堂は。杉山マサ子さんは。

お便り広場（到着順、敬称略）

白金霞十一月号頂きました。光成さんが御元気の姿を拝見して安心至りましたが、とにかく御身体は充分気をつけて下さい。できるだけ仕事は流してラクをして下さい。私も少しはヒマになりましたので来年は暮会所にでもと考えていますが、勉強の方はサッパリです。句の方も駄目ですね。益々の御活躍を祈ります。来春でも梅の花で如何でしょうか。璃子さんは御元気でですね。
(11.26 小山陽也)

（陽也さん暇になりましたら、もう一度俳句に目を向けて下さい。俳句は人のためではなく自分のために作るのです。先月号に健二さんが書かれた句会の理想形としての「個々円成（こんげんじょう）」を理解するのは難しいでしょうが、人の評点を気にせず、自分流の句を作る、それが普遍的なものになるように己と闘う。己と戯れるのではなく。年長の陽也さんに偉そうなことを書いて恐れ入りますが、創作すること、物を生産すること、其の貫道する物は一なりです。高志）

洋服ありがとうございます。おかげ様で、草太は堂々としていました。マドレーヌ焼いたので少しなら大丈夫なので食べてね。白金葎もいつもありがとうございます。ございます。では寒くなってきたのでご自愛ください。

(127 晶子)

源氏がいわば「四十八歳の抵抗」で臘月夜への情火を再燃させるところで、講義は今期の最終日を迎えて、六条の大殿の恋の行方は来年へ持ち越しとなりました。昨日、帰りの電車での雑談中に頼山陽の妻も漢詩人の令名高かったと口を滑らしてしまいました。気になつて帰宅後に調べてみると、それは弟子で恋人でもあつた江馬細香のことであつて、妻ではありませんでした。近頃老いぼれて私の記憶はだいぶ怪しくなつています。独身の山陽は、彼女を見初めて求婚し大儒者の父親に断わられます。しかし山陽を敬愛する細香は、結婚成就のために自ら積極的に動くのですが、すでに時遅く山陽は大先輩の養女と結婚していました。その後、細香は山陽が没するまで師事しつつ、終生独身を通し、頼家とも密接に寄り添い、文人・画人として盛名を謳われます。安政の大獄で刑死した山陽の息子、頼三樹三郎を追悼する漢詩を残しているとか。彼女は勤王のシンパでもあつた。山陽と細香、一休と森侍者、良寛と貞心尼、石原純と原阿佐緒などのように男女の

結縁の不思議さを考えさせられます。山陽について話していて絶唱・泊天草洋の名文句「雲か山か呉か越か 水天髻髻青一髪」が浮かんできて愉快でした。「鞭声 肅々夜河を渡る」も山陽と聞いて、少年時代詩吟の名調子にうっとりしたことを思い出しました。漢詩文訓読独特の明快な音楽性とイメージ喚起力は大きな魅力で、昔から日本人の心の琴線に深く触れてきました。光みちさんは、安芸の小京都で頼家の本拠地でもある竹原の産とか。大昔、竹原へ呉線で行ったおぼろげな記憶があります。須磨のように塩の里であり佳人の里でもあると自ずと領いた次第です。明治以前において漢詩文は我が邦文学の大きな柱でありました。芭蕉、蕪村はいうまでもなく漱石、露伴、荷風等々の文藻の大きな源泉ともなっています。その意味で江戸期漢詩文を再発掘した中村真一郎や富士川英郎の仕事に敬服して、読了を望んで、老いてはられない気持ちでおります。山陽と深い交流のある菅茶山についてこれから書きたいのですが、大いに期待しています。私なりに嚙つてみていろいろご教示に預かりたいと願っています。十二月の句会が楽しみです。(12.1 健二)

お誕生日おめでとうございます。大したものではないけれど、使っていただけとうれいします。マスクは夜寝る時に着けると喉が潤います。寒くなつてきて

いますので、風邪などひかれませんように。(中略)では良いお年をおむかえ下さい。

(12.6 晶子)

月日の過ぎるのはほんとうに早いですね。高志さんが悪いと聞いて手紙を書こうと思いつながら気になっていたのですが・すみません 心配はしていたのですが、それでも畑続けているのですね。里芋たくさんありますがとうございしました。(中略)高志さんの所は敏子さんが良く理解してくださっていますので安心して大丈夫です、敏子さんが身体壊れないようにと心配しています。どうか大切にされますように又しつかりさえてやって下さい。誰でも長所短所あるのですが二人で力を合わせて暮らすのもたいへんな努力だと思います。

私は一人でがんばったと思っていましたが夫婦で長い間がんばって来られた人を見るとそれみたいへんな事だと今頃つくぐ思います。私は自分の思うまゝ生きて来たのだと思う事があります。峯子を見ていても孫も居ていいなあ・と思うけどそれにはそれで努力しているようです。又早く逢う事が出来るといいですね。本はむずかしいです。高志さんの本ね。

高志・敏子様

(12.7 幸子)

十二月四日(日)午後七時慈姑とお便り頂戴いたしました。落葉が本格的になりましたが、二三日小春日のようで日中は楽ですが、夜はさすが、師走の寒さと

なりました。お珍しくもなつかしい慈姑、沢山にありますがとうございます。折角のお義姉上様からのお品をお裾分け下さいまして申し訳ございません。何年にも口にしたことなく昔母が芽(シッポ)を残して皮を剥くのが大変と云っておりましたしお正月はエンギモノでお膳にあり、ある時は摺り卸して玉子やきに入っていたのを思い出しました。自分で料理した事は二回を上廻ることなしと思っております。みち様からのプレゼント故、お正月用に甘煮に挑戦するつもりでございます。(レシピ助かります)中国産をスライスし缶詰になったのはありますし、八宝菜か何か中華料理で頂くこともあります、日本産とはいさゝか味の開き

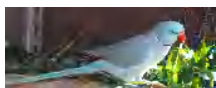
あります。何とか上手に煮ることができそうです、ガンバります。姉が逝つて一人ぐらしになり、生活がかなり変わったように思います。仰せの如ききつちりした生活を心がけていますものの事が電氣に関わることだと、パニックになりこうゆうときこそ、男性一人居ればと思います。たいいていの男性はテレビラジオの事などチョコット直せますのでね、五時か五時半起き、十二時就寝のクセを直したくてもこれが普通に定着してしまいました。朝食八時に一時間かけてゆっくり新聞を読み始めると眠くなり、少しトロく、後かたづけなどしているとすぐお昼、おながが空かずランチ抜

きが多くなり、どうしてこんな生活になったのか、年の故にしています。三度三度きちんとしていましたのに一人になるとワガママも出るのでしょうか。庭の小菊やピラカンサ、アブケロン、バラ、つわぶき、サフランくらい色のあるものがそろそろ終わりに近くその後始末など気にかゝることばかりです。ブルーベリーは紅葉の半ば椿のつぼみは固く、万両がきれいになって来、柚子は豊作です。手もかけないのに、生りはじめましたらよく生りますが、すゝぽけた柚子はお持ちの方が多いようですが、お送りしましょうか。まだ切っています。冬至迄には得意の高枝剪りで収穫です。毎日が失敗ばかりで一日に何度も「我ながらバカだ」の定まり文句のひとり言が出ます。今日もカラスにバスケットをやりシガーバスケット五本ほどやり足許のしめんらんの上に袋を置き辺りを掃いていましたら、カサ／＼云うので見ましたらクロームが袋ごと持ち去りました。手から大きなクチバシで取るのが面白く甘やかしていたら裏切られました。四十雀山雀すゞめ、鳥、キジ鳩、ワカケホーセンインコ（首の廻りに赤い輪をかけたような緑色、尾は青の大型インコ）ウヅラ、ヒヨドリ、カワラヒワ、ユゲラ、背グロセキレイ、白セキレイ、ヒタキの類、これらが過古現在の訪問鳥です。エサはひまわりのタネ、ごはんの洗い流し、シガ

ーバスケットなどの粉もの、猫の残した魚系のエサ、カラスに至っては何でもです。イカの内臓、肉の脂、大好物です。鳥達の食事の様子が楽しくて買物も人間様より生きもの用にお金が出て行きます。よくしたもので、朝昼夕とやってきます。留鳥の他居なくなる時期はやっぱりつまらなくなります。こんなワカランチンパレオガス（漱石先生もよく使われたそう）の婆さんにいろいろお心づかい甚しく甚しく御礼申し上げます。生きあきた人生ですが自分でどうこうも出来ず猫を見送らなければサヨナラもまゝなりませんので、今しばらくおつきあい願わしゅう存じます。

病後光成様ますお大切にみちさまもワクチンはお済みでもお氣をつけて下さいませ。私も十一月末にやっと済ませました。市の補助あり昨年迄千円が今年は千二百円となりました。御礼がおりやべりばゞあの繰りごとゝなりお許し下さいませ。ごきげんよう。十二月四日 四十一時長屋璃子（いつも氣が走りお読みになれない字となりお許しを。） 光みち様

白金霞を愛するあまりのお働きを心配しております。ご健康を第一にが定まり文句です。今朝このシーズン はじめて庭の汲み置きの水に氷が貼りました。指先で つゝけば割れるうす氷でした。お大切に。
光成高志様（二〇一六年十二月十二日 長屋璃子）



幼なの日しつぽと云ひしくわるの芽

璃子

みち様へ

(二〇一六年十二月十二日)

〔お礼〕先日はお世話になりました。健二さんも加わり、披露・批評も一層賑やかで、楽しいひと時でした。体に気をつけ、ゆっくりゆきましよう。瑠璃艶々の龍の玉を有り難うございました。懐かしい記憶が甦ります。「米ちゃんも静せいくんもとうに傘寿龍の玉」

「龍の玉弾む飛石母がゐて」(お願い)先月の悦子さん追悼号をもう一冊頂けないでしょうか、実は愚妻が水泳友達から所望されました。12月号に同封して頂けたら幸いです。兄上の御喪中ゆえ、新年の挨拶はぬきにしますが、お二人ともどうか呉々も御身ご大切に。一月例会を楽しみにしています。(12.19 孝三)

昨年はいろいろお世話になり有難うございました。厚く御礼申し上げます。今年もよろしくお願いいたします。毎月の句会楽しみにしております。健康には十分ご注意ください。高志様みち様 (12.19 昭七)

○「エツコ句選」みたいなものを作りました。御笑覧下さい。次の句会で皆様にも配らせて頂きます。

○先日お願いしました追悼号、あと五部(計10部)頂けますでしょうか?お手数かけて済みません。

ではよいお年を。光成様

陽一拝(12.21)

受贈誌 (H 28年 12月号)

猪食べて星が一粒ずつ見える(彩132号)

平野ひろし

蒟蒻の刺身厚切り冬山家(〃)

〃

直観力欲しや寒九の水を飲む(〃)

〃

異界より来たる入道ラ・フランス(〃)

〃

秋水に亀浮く四脚放下して(〃)

佐藤恵子

曼珠沙華棚田三角丸四角(〃)

平山三郎

葡萄棚ぶだうのひかり地に展ぐ(〃)

清野かつ江

秋天に羊生みつつ飛行機雲(〃)

茂木つや子

パン・スグラス靡く鬘たがみ馬肥ゆる(〃)

影山公子

田仕舞の煙まつすぐ陶の里(あすか12月号)

野木桃花

穂をつけて早や風癖の芒かな(〃)

山尾かつひろ

冬靄の夜の横浜遠汽笛(東京ク12月)

文男

鐘樓の脇が抜みち大根畑(〃)

理佳江

大本山風待つ刺羽鳴きし朝(〃)

万世遊

枯草や梵字ひとつの墓一基(〃)

晴夫

枯草や通りがかりの犬が尿(〃)

璃子

こだま

あちこちに毬かためあり栗林(彩132号)

光成高志

山尾かつひろ吟行ノート H 28・12・09)

「枯葉」ふつと口遊ぶカフェを出て

飯田孝三

スカイツリーに灯が入る冬夕焼

〃

冬の蠅禿頭にゐて身じろがず

光 みち

縄跳の中に入れたる寒落暉

”

岩垣の隙を覆ひて石路の花

光成高志

冬夕焼飛行機雲に及びをり

”

賢治童話 雁の童子

武者昭七

広大な流砂を越えて年老いた一人の旅人が沙車という古い街にたどり着く。丘の一角にある小さな祠に目をとめた旅人がその由来を尋ねるといふ形で物語が進行する。いわゆる賢治の西域童話のひとつである。

昔、スリヤという人がこの街にいた。名門だったというがすでに落ちぶれていた。従兄がいて鉄砲の名手であった。従兄の殺生を悲しんだスリヤは「どんなものでもいのちは悲しいものなのだぞ」と説き続けたけれど従兄は取り合わなかった。ある日かれは六羽の親子の雁を射た。親子は炎に包まれて地上に落ち一人の孫をスリヤに託して天にかえった。もともとは天の眷属だったけれど罪あつて雁となり今許されて天に帰るのだという。童子は「雁の童子」と呼ばれてすくすくと成長した。童子はスリヤを「お父さん」と呼んだ。スリヤもどこかで童子の顔に見覚えがあるように思つたりした。

ある日街外れの砂の中から古い沙車大寺の跡が発掘さ

れ三人の天の童子が描かれている壁画がみつかった。それを見た童子がスリヤに倒れ掛かったまま云つた。

「この壁の絵は前にお父さんがかいたものです。いまおじいさんがお迎えをよこしたのです。お父さん。私はあなたの子です。」迎えによこしたというおじいさんスリヤ。そして雁の童子。三代の家族は天上世界から現世へと長の年月、輪廻のめぐるまま転生をかさねてきたのであろうか。雁の童子は前世の自分にいま出逢つたのである。

童子は聡明だったけれど子供らしからぬ不思議な態度を何度か見せた。あるときはスリヤに向かって「水は夜でも流れるのですか」とたずねる。「水は夜でもながれるよ。水は夜でも昼でも、平らな所でさえながれたらいつまでもいつまでも流れるのだ」というのがスリヤの答えだった。流れて止まぬ水とはなにか。それはかたちを変えて前世から現世へ、現世から来世へと途切れることなく流れ続けるいのちの河であろう。

スリヤが従兄に向かって絶えず言い続けたという「どんなものでもいのちは悲しいものだぞ」とは輪廻するいのちへの哀憐である。聞き終わって老いた旅人はまた流砂の彼方へ消えて行つた。

芭蕉のかるみ以後（31）

光成高志

芭蕉二百年忌の子規において写生が唱えられたといつたが、江戸時代の文化文政の頃、私の郷里の菅茶山（一七四八—一八二七）が漢詩に写生を取り入れ「実境を写し、実感を詠う」詩を作れと主張している。子規はこれを知らなかったと思うが、既に詩の世界では六如上人（一七三四—一八〇二）や茶山を中心としてなされた革新が、短歌や俳句の世界でようやく明治20年代に子規によってなされたというべきである。漢詩は江戸時代は儒者の嗜みや余技とされていた。白石は学者たるもの詩文などを工夫すべきであつて、俳諧を好きになつては高い木を下りて幽谷に入るようなものと思ひ途中でやめてゐる。芭蕉没後の18世紀になつて、詩が活気を呈してきたのは、それに先立つ伊藤仁斎の古学や荻生徂徠の古文辞学によつて学問の世界でも大きな変動があり、それが氣運となつたのだ。大きな変動とは官学としての朱子学に反抗する私学の興隆であつた。最初漢詩は唐詩の模倣であつて、自己の感興を表現するというより、古典主義的修辭法や作詞術の習得教本であつた。漢詩が日本化されたのは天明・寛政の頃つまり茶山の頃である。芭蕉没後百年が経つており、蕪村一茶の時代である。唐詩を排してむしろ宗詩に学

べという風潮になつてゐた。宗詩は現実的、写實的であり、叙述的である。自分の生活とその環境をうたい自己の感興を述べるという方向へ導かれた。個性的、写實的な表現となつたのである。その先駆は先の六如りくによ上人であり、その写実主義を受けて立つて大成させたのが菅茶山であつた。この時代既に学問や芸術の世界には自由な氣風が支配し、因襲打破と個性尊重の傾向が明らかになりつつあつた。安永三年（一七七五）解体新書の刊行があり蘭学が勃興する。これは西洋の実証主義的精神の成果である。同時代の絵画や詩歌の世界にもこの写実主義は波及する。蕪村の「稻妻や波もてゆへる秋津洲」はその時代の雰圍氣を醸していると我々もコビアンで論じたことがあつた。六如上人の漢詩は次のようになり斬新なものである。

曉枕覺時霜半晞 曉枕覺むる時 霜半ば晞かわく
満窓晴日已熹微 満窓の晴日せいじつ 已に熹微きびきたり
臥看紙背寒蠅集 臥して看る 紙背に寒蠅かんようの集るを
雙脚按捺落復飛 雙脚按捺そうきやくたさして 落おちて復また飛とぶ

冬の朝早く目が覚めると、天氣がよく霜が半ば乾いてゐた。障子窓いっぱいにかすかに日が当たつてゐる。蒲団の中で寝たまま見ると、障子に冬の蠅が集まつてゐる。両手をもんだりこすつたりしながら落ちてまた飛んでゆく。一茶の蠅の句「やれ打つな蠅が手をする

足をする」を思い出す詩だ。しかし、南宋の楊誠齋にこれとよく似た詩があるそうで、それが気に入って蠅をよく見て作つたらしい。今読むとよく客観描写した詩であるが、当時としては奇抜で卑近な言葉を使わずぎるとか非難されたようです。菅茶山の俳句的漢詩の一例を左に示す。

女兒傾筐爭新橦

女兒筐きょうを傾けて新橦をとる

雨後寒生迴野風

雨後寒生ず迴野けいの風

知是授衣期已近

知りぬ是これ授衣の期已に近きを

村家竹裡響綿弓

村家竹裡ちくり綿弓めんきゅう響く

女の子たちが筐かこ傾けて綿を摘んでいる。秋雨の後寒さを感じる風は遙か彼方の野原から吹き寄せてくる。そろそろ冬着の支度が己にも近くなったと知った。村の竹藪を通して綿繰りの車の音が聞こえてくる。

実に視覚触覚で具象化し、距離的な広がりもあり農村の季節感の印象深い風景がよみがえるではないか。綿弓というのは、綿繰り機で綿と種を分け、指で弦を弾き、綿の繊維をほぐす弓であって、弾く時にぼんぼんという音が出る。恰も琵琶を弾いたような音である。芭蕉の野ざらし紀行に「わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく」がある。茶山は芭蕉を尊敬していたので綿弓の詩を書いたという人四もある。農村の風景を詠った詩は茶山の晩年に実に多く、私には郷愁を誘うものばかりである。次の水鶏の鳴く詩は蜻蛉日記や源氏物語にも描かれており、さらに芭蕉の幻住庵記にも出てくる。雨断梅天鬱未晴 雨絶やみて梅天鬱として未だ晴れず 満溝新漲夜庭明 満溝新たに漲りて夜庭明るし 隣機無響人初定 隣機響き無く人初めて定まり 門柳陰中姑悪鳴 門柳陰中姑悪鳴く 梅雨続きの空はまだ晴れやらず、溝は満々と水が漲って夜の庭は明るく感じられる。隣家の機織りの音も静まり人の気配もない、門前の柳の木陰で水鶏が鳴いている。

元禄七年芭蕉最後の旅の名古屋よりの途中弟子たちが待ち受けてゐて、数日泊つて歌仙を巻いている。その発句に「水鶏啼と人のいへばや佐屋泊」がある。なお、姑悪は水鶏の漢名である。その声が姑が悪いというふうに関係することから、虐められて死んだ嫁の化身と考えられて姑悪と呼ばれたという。これは中国の故事である。

(2016・10・16)

【参考文献】

- 四管茶山と頼山陽 富士川秀郎 平凡社 昭和52年
五管茶山の研究 朱秋而 京大博士論文 平成12年
六管茶山 西原千代 白帝社 広大博士論文 平成21年

我孫子日記

	11/18 例会
*	11/25 北千住
*2	11/28 戸定邸
	11/30 SOA
*3	12/1 那須休戦村
*4	12/2 帰京
*5	12/4 印西文化 センター
*6	12/7 下手賀川
	12/11 金子兜太
*7	12/14 三井記念 美術館
	12/16 例会

＊
長屋門潜れば平屋石露の花

*2 クラリネット縦笛の体のうねる冬紅葉

*3 眼前にひとかたまりの冬の雲

白樺の近くにありて暮れ早し

見晴るかす那須の集落日短か

*4 吹越や日の出に光り舞つてをり

那須嵐地面の雪を捲りをり

那須街道赤松のほか枯尽くす

*5 餅を撒く神楽火男人を見て

*6 八の字の水脈を重ねて白鳥群

白鳥と鵜が仲良く川泳ぐ

大鵲の群句読点いや胡麻の如

かちやかちやと啄む白鳥大家族

白鳥の羽はたく上の橋にをり

*7 与勘平に一間離れお福さん

編集後記

高志

"

"

みち

問士心

みち

高士心

"

み

高士心

増田陽一さんから故悦子夫人の遺句集が届いた。二百句近く陽一さんが抄出された。来月頂けるとのことです。先の追悼号も増刊の要望を頂いている。新潟の木戸敦子さんから「ご縁ブック」なる全国124人の投句集も安く贈られて来た。毎年刊行していて13年目になるとか。

下の写真は下手賀川に
いる瘤白鳥の群れです。

鶺鴒も百合鷗も鳩も鶺鴒も
その餌付けにつられてそ
れぞれ百羽近く来ている
ので紹介しました。

来年平成29年は淡々と進みたいと思っておりますので、どうか来年もよろしくご協力をお願い致します。良いお年を。



白金葭 12月号 (第70号) 平成28年12月発行

編集・發行人 光成高志..(〇四—七一八七—一〇六八)

發行所 270
1119
我孫子市南新木 2
2
14
17

表紙の題字.. 加納綾女。写真.. 12月22日の白金蔭